

## 平成 26 年度 病害虫発生予察 特殊報 第 2 号

---

病害虫名： キウイフルーツかいよう病 (Psa3 系統)

病 原： *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* (Psa3 系統)

対 象： キウイフルーツ

---

### 1. 特殊報の内容

キウイフルーツかいよう病 (Psa3 系統) の発生を都内で初めて確認した。

### 2. 発生経過

(1)平成 27 年 2 月末、都内多摩地域のキウイフルーツ園の栽培樹で白色並びに赤色の樹液の漏出が認められた。

(2)同年 3 月上旬に現地調査を実施し、当該樹から採取したサンプルから細菌を分離し、当病害虫防除所において PCR 検定を実施したところ、キウイフルーツかいよう病 (Psa3 系統) と確認された。

(3)キウイフルーツかいよう病 (Psa3 系統) の東京都内での発生確認は初めてである。本病は平成 26 年 5 月に国内で初めて愛媛県で確認され、その後、福岡県、佐賀県、岡山県、和歌山県、静岡県、茨城県、神奈川県で発生が確認されている。

### 3. 病徴

(1)本病は枝幹、新梢、葉、花蕾に発生する。

(2)感染樹の枝幹では 2 月頃から、白濁した菌液もしくは赤色の樹液の漏出を確認できる。

(3)伸長中の新梢が感染すると、はじめ水浸状の病斑を生じ、それが次第に黒色となり、亀裂を生じて萎凋枯死する。結果母枝や枝幹では菌液や樹液の漏出が認められる場合がある。

(4)発病葉では不整形の褐色斑点が形成され、斑点の周囲にわずかに黄色の黄色帯 (ハロー) が認められるが、既発生県の報告によると「Psa3 系統」は黄色帯 (ハロー) が明瞭でない場合もある。

(5)花蕾ではガクが褐変し、花の腐敗落花が生じるが、花腐細菌病と症状が類似していることから、外観での判別は難しい。

### 4. 病原菌の諸性質

(1)病原菌は細菌の一種で、風雨や作業器具、接木により、葉や枝の傷口、気孔及び水孔から感染すると報告されている。一次伝染源は罹病樹の枝幹から浸出した細菌液で、3 月～6 月及び 10 月～12 月頃の風雨による細菌の飛散や汚染した樹液の付着により、葉や新梢で二次伝染を繰り返す。

(2)病原菌の生育に好適な温度は 10～20℃程度である。

(3)既発生国では緑色果実品種より黄色果実品種で被害が大きいとの報告もあるが、国内では明確な知見は得られていない。

## 5. 侵入防止対策および注意点

- (1)適期に薬剤を散布する(表1)。特に病原菌が増殖しやすく、樹体内の菌密度が高い状態となる発芽期から果実肥大期まで、及び収穫後から発芽前までに実施する。
- (2)風当たりが強い園地では防風ネット等による風対策を行う。
- (3)苗木、穂木及び花粉等は本病の症状がない清浄なものを使用する。
- (4)せん定作業に用いるハサミ等の器具は、樹ごとに「200ppm以上の次亜塩素酸ナトリウム水溶液」または「70%エタノール」を用いて消毒するよう努める。
- (5)切除を行った際には、切り口には癒合促進剤(トップジンMペースト)を塗布するなど感染を防止する。
- (6)園地から出る際には靴底の消毒などの対策を行う。また、園地作業に無用な者が園地内に立ち入らないよう留意する。

## 6. 感染樹が確認された園地の防除

### (1)感染樹の切除・伐採

- ・菌の分散防止のために登録農薬(表1)を施用し、速やかに発症部位(葉、枝)の基部寄りから切除(骨格枝あるいは主幹側に強く切り戻し)する。
- ・主幹または骨格枝の主幹付近で樹液の漏出が認められる場合は、主幹の伐採を行う。
- ・切除及び伐採を行った枝や葉は、焼却するか園地内に埋設(深さ50cm程度)処分する。
- ・切除を行った際には、切り口には癒合促進剤(トップジンMペースト)を塗布するなど登録農薬を施用し、感染を防止する。
- ・伐採を行った際には樹液が流出するため、枯死が確認されるまで主幹の切り口はビニール袋等で被覆する。

### (2)農薬施用

発病の有無を継続して観察するとともに、5の(1)に準じて農薬を施用する。また、雨が多く、気温が低い時には菌の増殖が続き、まん延リスクが高くなるおそれがあるので、開花期後から収穫90日前までに追加防除を行うことが望ましい。

### (3)植物の移動

他の園地へ本病が伝搬しないよう感染のおそれのある植物(果実を除く)の移動はしない。

### (4)器具等の消毒

せん定作業に用いるハサミ等の器具は、樹ごとに5の(5)に準じて消毒を行う。園地ごとに専用の器具を使用することが望ましい。なお、トラクター等の大型機械を感染が確認された園地に持ち込んだ際は、他の園地へ本病が伝搬しないようにその都度植物残渣やそれを含む土壌などが付着しないよう洗浄を行う。

### (5)その他

園地から出る際には靴底の消毒などの対策を行う。また、園地作業に無用な者が園地内に立ち入らないよう留意する。



図1 発生樹からの樹液の漏出

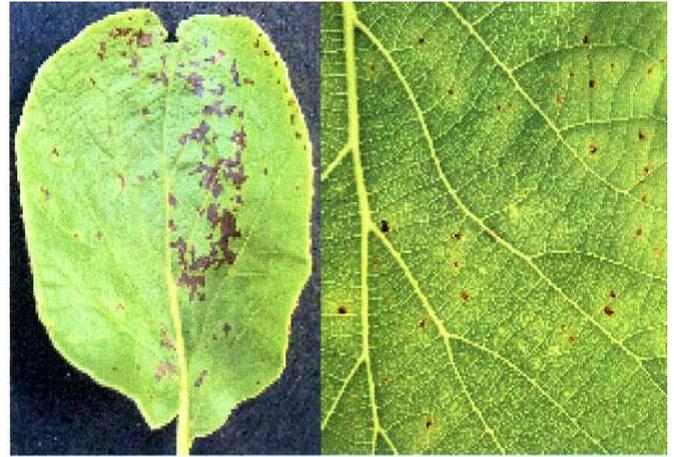


図2 葉の病徴（愛媛県提供）

表1 キウイフルーツかいよう病に登録のある主な薬剤（平成27年3月10日現在）

	薬剤名	有効成分	使用方法	希釈倍数	使用時期	使用回数
休眠期以降	銅ストマイ水和剤	塩基性塩化銅・ストレプトマイシン	散布	600～800倍	休眠期～蕾出現前	4回以内
	アグリマイシン-100	オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン	散布	1,000倍	落花期まで	3回以内
	カスミンボルドー カップパーシン水和剤	カスカマイシン・塩基性塩化銅	散布 散布	500倍 1,000倍	休眠期 発芽後叢生期（新梢長約10cm）まで	4回以内
収穫前	アグレプト水和剤	ストレプトマイシン	散布	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内
	カスミン液剤	カスカマイシン	散布	400倍	収穫90日前まで	4回以内
収穫以降			樹幹注入	200倍	収穫後～落葉前まで	1回
	アグレプト液剤	ストレプトマイシン	樹幹注入	1,000倍 (200ppm)	収穫後から落葉前まで	1回
	IC ボルドー66D	塩基性硫酸銅	散布	25～50倍	収穫後～発芽前	—
	コサイド3000	水酸化第二銅	散布	2,000倍	収穫後～果実肥大期	—